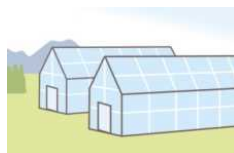


みず菜の周年供給体制の確立と市場開拓に貢献

したら い さ お
設楽 伊佐夫

【埼玉県上里町】



事業を契機として施設野菜を導入

国営埼玉北部地区(S42～55年度)は、関東平野の北西部に位置し、群馬県と埼玉県の県境を流れる神流川が形成したなだらかな扇状地台地で、水稲と野菜の複合経営を展開する農業地帯です。

氏は、事業によって導水が可能になったことを契機に、施設きゅうりの栽培を始めました。市場動向を見ながら、平成10年にはみぶ菜、平成13年からみず菜の栽培に切り替えました。

みず菜の導入による経営の安定化

みず菜は夏場の水の管理が重要な作物で、かん水のタイミングを間違えると軟腐病が発生しますが、設楽氏は、夏場は、地温上昇、泥はね、雑草を防ぐ白いマルチの使用、冬場は地温を上げる透明マルチを使う工夫や、かん水のタイミングの習得などにより、収益性の高い、安定的な経営を実現しました。

冬場の透明マルチ →



↑ 夏場の収穫作業

水稲育苗用スプリンクラーを利用した省力かん水

従来この地域では、かん水は畝毎にかん水チューブを敷設する方式が主体でしたが、周年供給のみず菜ハウスでは、かん水の度にチューブを設置し、撤収する手間がかかっていました。氏は、これを省力化するため、小型で移動に便利な水稲育苗用スプリンクラーを導入しました。スプリンクラーは1列設置すると、5畝一度にかん水できるため、従来に比べ、大幅にかん水労力を削減できました。



栽培技術と品質管理で市場開拓

サラダ等に欠かせない野菜となったみず菜は、栽培が難しい夏場も需要が増え、市場から出荷を求められていました。氏を中心としたJA埼玉ひびきのみず菜部会のメンバーは、互いに研修を重ね、夏場の栽培技術を習得し、各戸に予冷庫を設置し、収穫調製後、即予冷した後、農協に出荷するなど品質管理の徹底を図りました。

これらの努力の結果、周年供給体制と品質の良さが市場に認められ、当JA管内で生産されるみず菜の中でも、上里町分は別の包材を用いてブランド化し、京浜地域を中心に有利販売を実現しています。



設楽氏は、整備された基盤を活用した営農を確立し、また、家族経営協定を締結し、夫妻そろって認定農業者となっている他、妻の佳子氏が上里町の農業委員を務めるなど、夫妻とも地域のリーダーとして地域の発展に貢献しています。